医学小説としての『禁治産』

松　村　博　史

はじめに

バルザックの1836年の作品である『禁治産』は，作者の法律に対する関心を前面に打ち出した中編小説である。この小説の筋書きの中心にあるのは，デスパール侯爵夫人によって出された，夫の侯爵に対する禁治産の請求であり，この訴訟を巡って上流貴族の家庭の内情が明らかにされることになる。物語の主要な登場人物はデスパール侯爵夫妻であるが，それに劣らず読者の興味をそそるのは，この事件を追って奔走する判事ポピノの活躍である。そういう意味で，『禁治産』は全体が法律と司法を軸として組み立てられた小説であり，バルザックの作品中でも「司法小説」という名前を冠することのできる作品の代表と言えるだろう。

これはバルザック自身も恐らく意識していたところである。同じ作家の中編小説である『シャベール大佐』は，最初1832年に出版されたときには『和解』(*La Transaction*) と題されていた[1]。このフランス語は日本語で「示談」とも訳される法律用語で，若い頃大学で法律を勉強し，法律事務所でも働いたことのあるバルザックが，いわば裁判の判例のようなスタイルで物語を組み立てようとしたのであろう。『禁治産』もいわばそれと同じ系統に属する小説であり，リシュトレやル・ヤウアンクによる先行研究や，プレイヤード版の序文も，おおむねそのような視点からこの作品を捉えている[2]。

しかしこの作品には，司法的な視点の他にもう一つ，物語の中に存在する重要な視点がある。それが医学的な視点である。このような視点は，とりわけ小説のもう一人の登場人物，医師ビアンションの動きを追うことによって明らかになるが，司法小説的な側面のように前面に出ることはない。しかしこの視点は物語の最初から最後まで一貫して存在し，この小説を「司法小説」であると同時に「医学小説」たらしめているのである。この論考では，『禁治産』という作品の医学小説的な側面を明らかにし，そのような視点がこの小説にどのような新しい読みをもたらすかを考察する。

『禁治産』は，バルザックの中編小説の中でもとりわけ完成度の高い作品の一つであるが，少なくとも日本において決してそれに見合った評価を受けているとは思われない。1970年代に出版された創元社版『バルザック全集』からも漏れているし，小説家の生誕二百年を機に新しく出された『人間喜劇セレクション』（藤原書店）にも取り上げられることはなかった。そして残念ながら現在も簡単に入手できる翻訳はない。「司法小説」として書かれた『禁治産』を，あえて

「医学小説」として読もうとするのは，言うなれば小説を裏側から読み解こうとする試みに他ならない。ここでは小説の隠された糸を浮かび上がらせることによって，この作品が持つ緻密な構成と奥行きの深さを明らかにしていきたい[3]。

1．貴婦人の症候学

小説は，社交界の貴婦人に関する病理学的診断から始まる。最初の場面はフォブール＝サン＝ジェルマンでのサロンからの帰りがけに，ラスティニャックとビアンションがその夜の主役であったデスパール侯爵夫人を論評する様子を描いている。『ゴリオ爺さん』では薄汚いカルチエ・ラタンの下宿屋ヴォケー館で毎日の食事をともにする貧乏学生であった二人だが，ラスティニャックはいまや莫大な財産を手にしてパリの社交界の常連になっており，ビアンションは医者としての名声を確立している。

デスパール夫人の美しさと魅力にのぼせ上がって興奮気味のラスティニャックに対して，ビアンションは冷ややかな態度を示し，あまり乗り気ではない。そこでラスティニャックは「いったい君は，デスパール侯爵夫人がまるで君の病院に入院させなくてはいけない病人であるかのような口ぶりじゃないか」(p.421)[4]とビアンションを責めるのである。医者はさらに社交界の花形である貴婦人について冷徹な分析を進めていく。まず誰もが二十代と思いこんでいる侯爵夫人の年齢は，実は「三十三歳」で，それは彼女の顔に表れたいくつかの特徴を見ればわかるという。

> ねえ君，もし女性の年齢を知ることに関心があるのなら，彼女のこめかみと鼻先を見ることだ。女性がいかように化粧しようとも，彼女らが経験してきた激情の紛れもない証人をどうすることもできない。そこにはこれまで重ねてきた一つ一つの年齢が痕跡を残していくものだ。女性のこめかみがたるみ，しわが寄り，言わば色あせて来たら，あるいは石炭を燃やすロンドンの工場の煙突が降らせる目に見えない黒い粒のような点々が彼女の鼻先に表れたら，くわばら，くわばら！　その女性は三十歳を過ぎているのだよ。(p.422)

ここでビアンションは，女性の見かけの美しさ，華やかさに惑わされずに，いくつかの身体に表れた特徴を冷静に観察し，医者として診断を下していることがわかるだろう。そしてこのような医者の観察力は対象の内面にまで及ぶのである。ビアンション自身，また次のように語っている。

> 信じてくれ，医者というのは人間や物事を判断するのに慣れているんだ。僕たち医者の中でも最も巧みな人たちは身体の秘密を語らせながら，同時に魂の秘密も語らせることができるんだよ。(p.423)

こうしてビアンションは，デスパール夫人が病弱そうにしているが，実は鋼のように健康であること，あるいは華美な装いで財産があるように見せかけながら，実は借金を抱えているらしいこ

とを見抜いてみせる。

そしてラスティニャックが憧れ，誘惑しようとしている社交界の花形の女性，時の注目を浴びる女性について，次のように断言するのである。

> 社交界の女王は，もはや女性とは言えない。彼女は母親でも，妻でも，愛人でもありえない。医学的に言えば，脳だけの女性なのだ。それに君の侯爵夫人は，怪物性のあらゆる症候を示している。彼女の口は猛禽類の嘴のようだし，目は澄んで冷たく，言葉は優しげだ．そして機械の鋼のように磨きがかかっている．心以外なら，何でも動かすことができるだろうね。(pp.424-425)

この引用からわかるのは，女性が社交界の流行に乗り，注目を集めることを，ビアンションは必ずしも羨むべきこととは見なしていないということだ。それどころか，彼はそうした女性を一種の病気と考えているらしい。そのことが，彼がここで「症候」(symptômes) という言葉を使っている[5]ことからわかるのである。

しかしラスティニャックはこうした「診断」を聞いて，そこに一理あることは認めても，デスパール侯爵夫人に熱を上げることを止めようとはしない。政治的野心を持ち，貴族の女性の愛情を得ることによって少しでも高い社会的地位に就こうとする彼は，次のように反論するのである。

> 社交界の女王に対する君の糾弾攻撃は認めるとしよう。でも君はいわば問題の埒外にいるのだ。僕は女性としてはいつでもこの地上で最も純潔で，慎み深く，愛らしい女性よりも，デスパール侯爵夫人の方を取るね。(p.425)

プレイヤード版の序文を書いているギ・サーニュは，この二人のやりとりにおいて，バルザックの本音がラスティニャックの立場により近いとし，ここではラスティニャックの意見が勝利を収める[6]と考えている。しかしこの場面はむしろ，貴族女性の持つ二つの側面を，曖昧さを残したまま描き出していると考える方が妥当であろう。果たしてデスパール夫人は医学的に見て，本当に「病気」なのかどうか，それがこれからの物語の中で明かされていくことになる。

2．解剖学的視線

この小説が書かれた十九世紀前半，バルザックと同時代のパリの医学は，ビシャ（1771-1802）やコルヴィザール（1755-1821），ラエンネック（1781-1826）などによって開かれた解剖臨床的医学が全盛となり，ヨーロッパの医学でも最前線を進んでいた。この医学の方法はさまざまな病気の症候から出発し，そこから身体内部における病気の所在を突きとめ，内臓器官の病変の状態を推測するものであった。このような医学の発達は，医者たちが日常的に死後解剖を実践するようになり，病理解剖の知識が彼らの間に浸透することによってもたらされたものである。十八世紀

末から十九世紀前半にかけての，こうした医学における知覚の変貌は，ミシェル・フーコーが『臨床医学の誕生』において詳細に分析してみせているとおりである[7]。

バルザックもまたこのような医学の進展には多かれ少なかれ通じており，小説作品の中にもこうした最新の医学が可能にした観察方法を直接的・間接的に取り入れている形跡が見られる。また同時に，バルザックはこのような医学の新しい知覚のあり方を，小説の構造として取り込もうとしているように思われる。例えば『ゴリオ爺さん』において，小説家はパリという大都市に潜む病理を解剖学者のような目で暴いてみせるが，その時に小説は，あたかもパリの外面から次第にその最も奥底に進んでいくような空間的な演出を示す。小説の冒頭において，最初はパリの一区域であるカルチエ・ラタンの情景が描かれ，次いでひとつの通りの描写，そして下宿屋ヴォケー館の内部へと進んでいき，そこにうごめく人物たちの人間模様へと移るが，このような描写の運動はまさに解剖臨床的知覚を模したものと見なすことができる。フーコーの言うように，このような知覚において，医学の眼差しは表面に表れた症候から身体空間の奥底へとしだいに深く入り込んでいき，そこに病の中心を見出す[8]のである。

『禁治産』もまた，こうした解剖学的視線を大胆に小説の構造として取り込んだ作品であると考えられる。これまで見てきた冒頭の場面において，ラスティニャックとビアンションが一夜のサロンで目にした侯爵夫人の様子について話し合い，社交界の花形となる女性についての賛否両論を展開するが，小説はこのあと見事に転調し，翌朝ビアンションがパリで最も貧しいカルチエに住む叔父の裁判官ポピノを訪ねて行く場面の描写へと移る。これに続くパリの貧民街の描写についてはここでは詳しく触れないが，以前に別の私の論文で，ここに見られる描写がいかに臨床解剖的医学の方法と深く関係しているかを，当時の衛生学の文献やパリの医学的地誌と関連づけながら論じたことがある[9]。

この場面もまた謎多いパリの秘密，さらに言えばそこに隠された大都市が抱える貧困という病を，普通は人々の目に触れることのない知られざる通りに入り込んで行くことによって見出そうとする視点を示すものである。しかしこの小説の目の動きはそこに止まらない。大都市パリの中でも「最も貧しい界隈」(p.427) における貧困の現状の描写と，惨めな境遇の人々の間に天が授けた病気を治す薬草[10]とでも言うべき判事ポピノの人物像の説明を経て，観察の目は本題であるデスパール侯爵に対する禁治産請願の真相と，そこに隠された侯爵夫妻の家庭内ドラマへと向けられていくのである。

この小説において，一貫して医学的な視点を担っているのは医師ビアンションであるが，本来の主役とも言うべき判事ポピノもまた医学的な属性を与えられている。しかも彼は単に医者と言うだけではなく，他ならぬ外科医に何度も比せられるのである。彼は住居を構えるパリ十二区[11]のフアール通りにおいては，自らの財産をなげうって貧しい人々を救う正義の存在であるが，判事として裁判に携わることになると鋭い観察力を発揮する。

> 司法的な透視力の助けを借りて，彼は訴えを起こす者たちが訴訟の内情を隠そうとするためにつく二重の嘘の覆いを突き破ったのである。(p.433)

そしてポピノのこうした判事としての透視能力は，外科医の観察力と共通するものであることが，次の引用からわかる。

> 彼が判事であるのは，有名なデプランが外科医であるがごとくであって，かの有名な学者が人間の身体を貫くのと同じように，彼は人間の良心を貫いた。(同)

デプランというのは，この時代に有名であった実在の外科医デュピュイトランをモデルとする『人間喜劇』中の名外科医である[12)]。ビアンションが優れた医者の能力として，「身体の秘密を語らせながら，同時に魂の秘密も語らせる」ことまでできると語っているのは上に引用したとおりだが，ポピノがこうした名医の観察力，解剖に際して才能ある外科医が発揮する洞察力を持ち合わせているのは明らかだろう。

また同時に，ポピノは貧民の救済に当たっても医者のような能力を発揮する。ビアンションはこのような叔父を助けて，無料で貧しい病人たちの診察と治療に従事しているのであるが，ポピノが周囲の貧民たちを救済する行為の描写にも，医学の比喩が使われている。彼は「熱を持った傷が巣くっている臓器を取り除くように，集団的貧困を覆っているぼろ切れを全て取り除いた」(pp.434-435) のであり，また別の箇所では，彼が「その貧困を手当てした貧民」(p.440) という表現も使われている。

『禁治産』前半のこの一節で描かれる貧民街と，これからポピノがビアンションに伴われて探っていこうとする貴族家庭の内情とは，全く種類の異なる事柄であるが，しかしポピノの目には，これら二つはお互いに対比させることのできる二つの境遇と映っている。彼が救済しつつある貧しい人たちは，惨めな環境にあっても人間としての純粋さを見せる存在であるが，一見華やかな暮らしを送り，満ち足りているように見えるデスパール侯爵夫人は，実際にはそれほど幸福とは言えないかも知れない。この貧民街の場面の翌日，ポピノはデスパール夫人の豪華な館を訪ねて行くのだが，その際に彼の目は次のような動きを示す。

> 前の日には自宅の面接室の奥で，民衆の泥まみれになった衣服の下に，惨めさの中の偉大さを見出そうとした彼の目は，今日は同様の明晰な眼力によって通り過ぎる部屋々々の家具装飾を丹念に観察し，そこに偉大さの中の惨めさを見出そうとしたのであった。(p.456)

ポピノの観察力は，人を欺きやすい外観に惑わされることなく，わずかな手掛かりをもとに物事の内面の真実へと突き進んでいく外科医のそれであり，その視線の動きはすぐれて解剖学的である。こうしたポピノの働きによってデスパール侯爵夫妻のそれぞれが抱える秘密が明かされていくのだが，そこには医学的な物の見方を体現するビアンションの視点がつねに寄り添っている。

3．侯爵夫人の病

この小説の筋立ての中心にあるのは，デスパール侯爵夫人によって出された，夫の侯爵に関する禁治産請願である。禁治産は法律用語で，心神喪失状態にある者を保護するために，親族などが後見人になって財産を管理する制度であるが，夫人の申し立てによれば，夫のデスパール侯爵が「精神的・知的能力において深刻な変調をきたし，心神耗弱・喪失状態となっている」(p.443) という。しかも侯爵は長い間「そのおぞましい醜さが誰からも認められている老女」(同) ジャンルノー夫人の支配下にあり，デスパール侯爵の財産から生じる全ての歳入がこの年老いた夫人とその息子とに譲渡されているというのである。おまけに侯爵は『絵画的中国史』という豪華本を配本で出版するために莫大な資産をつぎ込んでおり，中国の風俗習慣に入れ込んで全てを中国の風習と関連づけ，共に暮らしている二人の息子たちにも中国の歴史や方言などを学ばせている。以上のような理由により侯爵に対する禁治産を請求したいというのが，請願書の内容である。

ビアンションはこの請願書に容易に騙され，すぐに侯爵が精神異常をきたしているに違いないと決めつけてしまう。しかも彼はジャンルノー夫人が侯爵に及ぼしている影響力について，当時流行していたメスメルの動物磁気理論まで引き合いに出して説明しようとする。バルザック自身がいわゆるメスメリスムを信奉していて，その学説を擁護していたのはよく知られており，この一節はその影響がよく指摘されるところである。しかしながらポピノはこの出来過ぎた請願書の裏にそれを提出した侯爵夫人の利害と陰謀をかぎつけており，ビアンションの動物磁気を援用した仮説も，「それじゃお前まで例の桶や壁越しの透視などという，メスメルのたわ言を信じるのか」(p.445) と一蹴するのである。そしてこれからの物語の展開の中では「あまりに多くを証明する者は何事をも証明しない」(p.448) と請願書に疑いを持ち，「一つの鐘にしか耳を傾けない者は一つの音しか聞くことができない」(p.447) として，夫である侯爵の言い分も聞くべきだとするポピノの主張が裏付けられていくことになる。

このように物語は禁治産請願を巡る法的な争いとして展開されるが，それと同時に，医学的な観点から見れば，これはデスパール夫妻の双方に関わる病理学という側面も持っているように思われる。すなわちここで問題になるのは，果たして病気なのはデスパール侯爵なのか，それとも夫人の方なのか，ということである。バルザックのテクストは，この問題を考えていくためのさまざまな手掛かりを与えてくれている。例えばポピノは，デスパール侯爵の精神的・知的能力の衰退を事細かに描写した請願書を読んだあとで，侯爵夫人を訪れて話を聞くように勧めるビアンションに対し，「お前の言うとおりだ。[…] 頭がおかしいのはこの女の方かも知れないからな。では会いに行くとしよう」(p.450) と答えているのである。

それではまずこのような医学的観点から，侯爵夫人の人物像を探ってみることにしよう。この社交界の花形である貴族女性の肖像は，まさに健康と病気という二つの極の間を揺れ動き，外見だけからは読み取ることができない不透明な命題として提示されている。そもそも上で引用したように，夫人の年齢だけを取ってみても，よほどの観察力の持ち主でなければそれを見抜くこと

ができないのである。

侯爵夫人は世間に向けては自らを病弱に見せかけている。このことは小説の処々で触れられており，例えば「病弱で蒼白いこの女性」(p.423)，あるいは「病弱な外見」(p.424) などの表現が見られる。ビアンションもまた，ポピノを侯爵夫人に会いに行かせるための口実として「デスパール侯爵夫人は病気がちで，神経質で，繊細な女性ですので，叔父さんの鼠の巣のような面接室では気分が悪くなることでしょう」(p.450) と言っている。また彼女はのちにポピノとビアンションが訪ねた際にも，自ら「病気が重く，外出することができない」(p.458) と言い訳しているのである。

しかしながらビアンションは最初のラスティニャックとの会話で，この病弱さが見せかけに過ぎないことを看破してみせる。

> この病弱で，蒼白く，栗色の髪をした女は，自らの病気のことをかこちながら他人の同情を集めようとしているのだが，本当は鋼鉄のような健康さに恵まれ，狼のような食欲と虎のような力とずる賢さを備えているのだ。(p.423)

それではどうして彼女のような存在は仮病を必要とするのか。その理由の一つは，自らをいつまでも若々しく見せておくためらしい。侯爵夫人の肖像が描かれている箇所では，次のような一節が見出される。

> 巧みに整えられた巻き髪が彼女のこめかみを隠していた。彼女はいつも薄暗い光の下に身を置き，病人を装っていたが，それはモスリンを通した光の保護的な色合いの中にとどまるためであった。(p.451)

前の部分で，ビアンションが女性の年齢を見抜くためにはこめかみを見るといいとしていたことを思い出すといいだろう。そしてポピノもまた，こうした侯爵夫人の「演じられた病弱さ」(p.457) を一目で見抜いている。彼は「この女はまるで魔物のように健康らしいな！」(p.458) と独りごつのである。侯爵夫人の病気を理由に，ビアンションがポピノに彼女のところを訪ねていくよう頼んでいるのは，最初の鋭い洞察と矛盾するようだが，このビアンションによる懇願がデスパール夫妻の謎を解明し，物語を大きく展開させる契機になっていることを考えれば，それもうなずくことができよう。

それならば逆に，デスパール侯爵夫人は「健康」と言えるのだろうか。いや決してそんなことはない。ビアンションの最初の会話にも，それからの物語の展開においても，彼女が病気である，すなわち心を病んでいることがさまざまな形で暗示されており，これらは全てビアンションが「症候」という言葉を使用していることを裏付ける。彼がここで医学用語であるこの言葉を使っているのは，明らかに社交界の花形としての彼女の状態が，一種の「病気」と捉えられていることを示している。これはデスパール夫人に限られることではなく，社交界の女王という地位に共通してみられる「病」なのである。

それでは『禁治産』の中で，デスパール侯爵夫人が直接的な言動においてどのように描かれ，彼女の「病気」がどういう筆致でたどられているかを見ることにしよう。夫人によって出された禁治産請願を読んだポピノは，早速翌日デスパール夫人の館を訪ねていく。ここから展開される会見の場面は，この中編小説の中でも最も緊張をはらんだ，物語の核心となる部分である。ここで注目すべきは，ポピノがデスパール夫人を訪問するに当たって，ビアンション医師が同行しているという点である。またデスパール夫人の館では，ラスティニャックが夫人と並んで待ち構えており，ここで二人の友が再会することになる。クライマックスとなる場面の舞台設定がこうして整うわけである。

ビアンションはこの場面において目立った役割を演じるわけではなく，むしろ自らその存在を消しているように見えるが，語りの上では重要な機能を果たしている。というのも，彼はここで医者として，身体の観察という視点を担っているように思われるのだ。この場面においてはポピノとデスパール侯爵夫人が，請願書の内容を巡って言葉の上での駆け引きを演じてみせるのであるが，その側らでデスパール夫人の細かい身体的な動揺を冷静に観察している視線がある。それが医師ビアンションの目である。次の引用にはそうした彼の態度がよく表れているだろう。

> ビアンションは，苦痛を声に出すまいとしながら拷問に耐える決意をした人物のようなよそよそしく厳かな態度を保っていたが，内心では彼の叔父がまむしを踏むようにこの女を踏みつけにする力を持っていることを望んでいた。(p.459)

ビアンションは直接に身体的な観察を語るわけではないが，後述するように，デスパール夫妻のドラマを語るために必要な要素を全て掌握し，のちになって実際に物語っているのはこの登場人物に他ならない。

もちろん，判事として司法上の透視能力を持つとされ，外科医デプランにも喩えられているポピノもまた，身体に対する観察力を持っている。彼が病弱さを装うデスパール侯爵夫人を一目見て，彼女が「魔物のように健康」であるという「診断」を下しているのは前に見たとおりである。一方，夫人の身体の動きに対する細かい観察がうかがわれるのは次のような場面である。夫であるデスパール侯爵に二人の息子を連れ去られて会わせてもらえないと嘆く様子を見せる侯爵夫人に対して，ポピノが次のような問いを投げかける。

> 「上の息子さんは確か十六歳でしたな」と判事が尋ねると，「十五歳ですわ！」と侯爵夫人は声を荒げて答えた。このときビアンションがラスティニャックを見た。デスパール夫人は唇を噛んだ。「私の息子たちの年齢があなたに何の関係があるというんですの？」(p.460)

夫人の息子たちが十分に自分の意思を持って行動できることを，ポピノが指摘する場面であるが，殊更に子供の幼さや頼りなさをほのめかそうとして不意を突かれた夫人の動揺が，声の抑揚や口元の動きにより露わに表現されている。

さらに，醜いジャンルノー夫人とその息子がデスパール侯爵の財産を横領して贅沢な暮らしをしていると申し立てたことに対し，それではあなたはどうなのかとポピノが夫人に指摘する箇所では，次のような反応が描かれている。

「もしジャンルノー母子が六万フランを浪費しているというのでしたら，あなたはどのくらい費やしておられるのですかな」と判事が言うと，デスパール夫人が答えた。「どのくらいって，だいたい同じくらいですわ」このときシュヴァリエ［・デスパール（＝侯爵の弟）］はぴくりと体を動かし，侯爵夫人は赤くなった。ビアンションはラスティニャックを見た。しかし判事は人の善さそうな風を装い，デスパール夫人はそれに欺かれた。シュヴァリエはもう会話には加わろうとしなかった。彼は全てが敗北に終わったのを悟ったのである。(p.463)

これら一連のやりとりにおいては，見ればわかるとおり人物たちの言葉を追っているだけでは真相はほとんど理解できない。本質的な意味を持つのはそれぞれの言葉に伴う登場人物の身体の動きである。こうした暗黙裏の駆け引きにおいては，身体こそが本当に起こっていることを雄弁に物語る。デスパール侯爵夫人の身体は，このように彼女自身の正体を少しずつ明かしていく。すなわち侯爵夫人が夫の侯爵に対して禁治産の訴訟を起こしているのは，どうやら彼女自身が自らの地位と暮らしぶりを維持するため，夫の財産を自由にしたいためだということである。社交界の女王という地位の危うさを指摘した同時代のテクストは他にも見られるが，それを経済的な側面から容赦なく暴いて見せているのはバルザックの独創的なところであろう[13]。

次は決定的な場面である。ポピノが侯爵夫人に，禁治産には誰かが後見になることが必要だが，その後見には誰がなるのかと問いかける。後見人として目されているのはこの場で沈黙して謎めいた様子でたたずんでいるシュヴァリエ・デスパールである。侯爵の弟であるこの人物こそが恐らく侯爵夫人の愛人であり，兄の財産を手にするために禁治産訴訟の裏で糸を引いているらしい。ポピノはその企みにまっすぐに切り込んでいく。

「一人の人間が心神喪失のために禁治産とされるには，後見人が必要になります。その場合，どなたが後見人になられるのですか」「夫の弟ですわ」と侯爵夫人が言った。シュヴァリエが会釈し，その場にいる五人の人物たちにとっては居心地の悪い沈黙の時が流れた。判事は侯爵夫人を手玉に取り，この女の傷口を暴いたのであった。ブルジョワ的な善良さをたたえ，侯爵夫人とシュヴァリエもラスティニャックも嘲笑する気になっていたポピノの顔が，彼らの目の前に真の相貌を現した。上目遣いに彼を見た三人は，この雄弁な口に無数の意味合いを認めた。滑稽な人物が炯眼な判事へと変貌したのである。(pp. 465-466)

ここで明らかになったデスパール侯爵夫人の心の傷は，夫人自身が直接それを認めたわけではないから，ここでは人物たちの沈黙と当惑によって表現されているだけである。しかしそうした「症候」から，心の内面にある疾病が，まるで目の前にあるかのようにありありと顕現する。こ

れこそが最初に説明した解剖臨床的な観察の力に他ならない。それではこの視線は誰が担っているのか。テクストの描写は侯爵夫人の様子に続いてポピノの雄弁な口へと移っていくが，それを見つめる人物としては夫人，シュヴァリエ，ラスティニャックの三人しか挙げられていない。しかしここでその三人とポピノを同時に眺める位置にいる人物は誰かと考えると，それはビアンションしかいないことは明らかであろう。ここでのテクストの語りは登場人物の一人であるビアンションに重なってくる。

4．デスパール侯爵の真実

一方，この物語において禁治産の根拠とされているデスパール侯爵の「心神喪失」の方はどうであろうか。侯爵は本当に病気なのであろうか。それをこれから見ていくことにする。

デスパール侯爵夫人によって提出された，夫の侯爵に対する禁治産請願書の内容については，前項の冒頭ですでに見ている。民法で定められた禁治産を適用するためには，当該の人物が心神喪失の状態にあることを証明しなくてはならない。デスパール侯爵夫人の依頼により，代訴人デロッシュにより作成されたというこの請願書が，医学の診断書のような言葉遣いになるのも当然であろう。そこでは侯爵は一年前から「心神耗弱・喪失状態」(p.443) にあると見なされ，侯爵は「意志能力の喪失」(同) により，美しいとは言えないジャンルノー夫人とその息子のために莫大な財産をつぎ込んでいるとされる。さらに『絵画的中国史』なる著作の出版を企み，日常生活においてもしばしば中国の制度や風俗に言及することについては「偏執狂」(p.447) と決めつけている。

ポピノは，これらの申し立てが真実であるかどうかを確かめるために，侯爵夫人との会見があってから三日後に，彼の家と同じカルチエ・ラタンにある侯爵の家を訪ねていく。このとき判事は書記を連れていたが，医師ビアンションは同行していない。彼はあとで叔父から侯爵との会見の話を聞き出すはずである。少し結論を先取りするなら，病気でもない侯爵に対しては医者は必要ないということだろう。

侯爵は四階に三部屋続きの事務所を構えており，一階に二人の息子と過ごすためのアパルトマンがある。ポピノは最初四階の一室を訪ね，そこから順に奥の部屋に進んで行って侯爵に会い，最後に一階のアパルトマンに通される。そうするうちに彼は次第に侯爵についての真実を知るようになっていくのだが，これらの人物の動きは次第により深い内部へと進み，それとともに真相に近づいていくという点でまさに解剖的である。ここでの侯爵の暮らしは「注意深く包み隠されている」(p.473) がゆえに謎めいており，そのため周辺の住人たちは「デスパール氏の家で観察される多くの事柄を狂気のせいにしようとする」(同) のであるが，果たしてここでも侯爵夫人の場合と同じように病気が発見されるのであろうか。

実はこの会見の場面に先立って，侯爵の住居と人物像の詳細な描写が置かれているのだが，答えはこれらの描写の中に半ば示されている。そこには次のように書かれているのである。

父親においても，子供たちにおいても，外観と内面とが調和していた。デスパール氏はその頃五十歳くらいであったが，十九世紀における高貴な貴族の模範となれるような人物であった。(p.476)

これは大変肯定的な評価であろう。また侯爵は言葉をどもる癖やぎくしゃくした歩き方など，「彼の狂気とされるもの」(同) を肯定する要素もあったが，他の特徴は「真直な，忍耐を受け入れる精神と，大いなる誠実さ」(同) を示している。また二人の子供たちも「端正な顔立ちで，優雅さも備えていた」(同) と書かれている。これらを読むだけでも，侯爵が心神喪失などでは決してなく，全く正常な精神の持ち主であることは明らかであろう。

ポピノが侯爵に禁治産請願の話を伝えたときの反応も，異常なところは少しもなく，そこには理性ある人間の怒りの表情があった。

ポピノはずっとデスパール氏を見つめていた。彼は理性にあふれる人間にはあまりにも残酷なこの宣告がこの人物の上に及ぼす影響を観察していたのである。デスパール侯爵は，ふだんは金髪の人らしく蒼白い顔をしていたが，その彼の顔が突然怒りで赤くなった。侯爵は軽く身震いし，椅子に腰かけて新聞を暖炉の上に置くと，目を伏せてしまった。(p.480)

しかしながら彼は，表情に「本物の苦悩」(p.481) をにじませながらも，もし真相を明らかにする場合でも夫人を傷つけることがないようにしてほしいと，妻に対する思いやりまで見せる。それを聞いたポピノは連れてきていた書記をさがらせ，侯爵と二人きりで話し始めるのである。

ここで侯爵は，ジャンルノー母子に関連して，彼の過去における最大の苦痛を物語り始める。それは心の内奥に深く秘められた苦しみであり，彼の不可解な行動の謎を解き明かすものでもあった。その秘密とは，デスパール侯爵の曾祖父の代において，当主が宗教戦争の混乱に乗じてジャンルノー家の先祖の財産を横領したというものであったが，ここでは筋を追うのではなく，こうした過去の罪が現侯爵の精神と身体に及ぼした影響について見ていくことにしたい。

ポピノの話がジャンルノー母子との関係に及ぶと，侯爵の感情はさらに高まり，彼は目に涙まで浮かべ始める。そして次のように話し始めるのである。

「実を言いますと，あなたのお話をうかがって私はひどく困惑せずにはいられません」と，侯爵はかすれた声で答えた。「私がそのような行動を取った理由は，私の死とともに葬り去られるはずでした……そのことについて話そうとすれば，私はあなたに秘められた傷を明かさねばなりません。家系の名誉をあなたに委ね，それがいかに困難を極めることかおわかりいただけると思いますが，私自身について語らなくてはなりません。これからお話しすることは全て私たちの間だけの秘密にしていただきたいのです」(p.481)

「秘められた傷を明らかにする」(« découvrir des plaies secrètes ») とは，ポピノが侯爵夫人の傷を暴いた (« le juge avait découvert la plaie de cette femme » (p.466)) ときと，全く同じ言い方が

されていることに注目したい。ここでもその傷を「解剖」することが問題となる。

侯爵の先祖による罪は，彼にとっては家の紋章につけられた「人知れぬ，恐るべき汚点，泥と血にまみれた汚点」であった。この過去は直接手を下したわけではない現在のデスパール侯爵にとっても，あまりにも重いものであった。そのことはこの秘密を語る彼の口をも鈍らせる。

> デスパール侯爵はここで話を遮った。それはあたかもこれらの記憶が彼にとって，今でもあまりにも重苦しいものであるかのようだった。「この不幸な男はジャンルノーという名前でした。この名前を言えば，あなたに私の行動の理由を説明することになるでしょう。私は激しい苦痛を感じることなしに，私の家系にのしかかるこの秘密の恥辱を思うことはできなかったのです」(p.484)

過去において先祖が犯した恐ろしい罪が，侯爵の心の内部の「病気」であり，それが彼に激しい苦痛を与えていた。登場人物が，自らの内に抱える秘密のためにもだえ苦しみ，ときにはその生命さえ危うくすることがあるのは，バルザックの作品においては重要なテーマの一つである。そのことを思い起こすには，『谷間の百合』において，夫への貞節という社会的・宗教的規律のもと，他人には明かすことのできないフェリックスへの恋心に苦しむモルソフ夫人の例を挙げれば足りるだろう。

しかし侯爵は曾祖父が家系に残した犯罪の重さを意識し，良心の激しい痛みを覚えながらも，「直ちにこの罪悪を償おうと決心」(p.484) する。彼は侯爵家の紋章に付けられた恐るべき汚点に気付いたときから「この汚点を清めることに専念」(p.483) し，財産と紋章を汚れのないまま息子たちに残そうと努めるのである[14]。侯爵はジャンルノーの直系である息子とその母親に会い，過去に侯爵の曾祖父が横領した土地の価値を一万一千フランと定めて，それを返却することに決めた。そして十数年かかってついにそれを完済したのである。「こうして，私は子供たちに少しの苦労をかけることもなしに，この返還を成し遂げたのです」(p.485) と侯爵は言う。

侯爵夫人の禁治産請願書でかけられたもう一つの嫌疑，すなわち侯爵が近代フランスと中国の制度風俗を混同し，『絵画的中国史』という怪しげな出版物にやはり莫大な資金をつぎ込んでいる「偏執狂」ではないかという疑いについても，侯爵はきっぱりと筋道を立てて否定する。侯爵は博学な家庭教師から中国の風俗習慣について教えを受け，二十五歳で中国語を習得していた。その頃から中国民族に対する賞嘆の気持ちを禁じ得なかったという。このような説明からは，侯爵は偏執狂どころかむしろ非常に開明的な貴族という印象を受ける。『人間喜劇』の中でも中国語を体得している登場人物は彼くらいではないか。それのみならず，彼自身も「私は現在のヨーロッパ諸国の状況を冗談めかして中国に比較することがありますが，私は中国人ではなくフランス貴族なのです」(p.487) と言っているのである。配本で出版されている豪華本『絵画的中国史』についても，しかるべき出版社で扱っており (p.486)，予約購読者は二千五百人もいて，利益も上げているという[15]。

デスパール侯爵は確かに，曾祖父の代から受け継いだ「病」に長年苦しんだが，強い意志の力でそれを自ら治癒してしまったと言うことができる。そのようにして彼は貴族家の汚された過去

を浄化し，晴れて自らも子供たちも，何らやましいことなく家系を未来に受け継いでいけるようになったのである。判事ポピノも侯爵の行為について「長い間の司法官としての人生において，今度目にし耳にしたことほど私を感動させたことはありません」(p.490) と述懐している。そしてこの「二重に高貴」である「私生活の偉大な人物」(p.491) と，心からの共感をこめた握手をして別れるのである。

5．夫婦生活の病理学

これまでデスパール侯爵夫人と侯爵の二人の登場人物について，医学的な観点から，それぞれが正常と言えるのか，あるいは病的な状態にあるのかを見てきた。その結果，最も注目を浴びる存在として社交界に君臨する侯爵夫人の方は，その地位を維持し，裕福な生活を送り，権勢を振るい続けるために心を病んだ状態にあり，一方カルチエ・ラタンに半ば隠遁するようにして謎めいた生活を送っているかに見える侯爵は，貴族としての名誉を重んじ，先祖が犯した罪も清算して息子たちと穏やかな日々を過ごしている極めて健全な人物であることがわかった。ポピノは「一つの鐘にしか耳を貸さない者は，一つの音しか聞くことができない」(p.447) という諺を引用しつつ，両側の主張を聞かなければ真相はわからないことをほのめかしていたが，こうした探求の進め方も，当時ラエンネックによって完成された「聴診」の方法[24]を思い起こさせる。

しかしこの小説は，単に侯爵夫人が病的であり，侯爵の方が健常であったということには止まらない。貴族の妻が夫を陥れようとして禁治産訴訟という悪事を企み，その財産を自由にしようとしたというのが物語の大筋であるが，作品はそのようにして単純には割り切れない，さらに深い問題を提示している。ビアンションは侯爵夫人の見かけではわからない計算高さ，冷酷さを見抜いて，「僕はまさにこの手の女を忌み嫌っているのだ」(p.424) とはっきり表明しているが，夫人のそうした性格をあらゆる機会をとらえて観察し続けている。そしてこうして偽りの姿を見せ続ける夫人に対して「深い同情の気持ち」(p.425) を覚えずにはいられないと言う。またテクストの語りの部分も，侯爵夫人の残虐な性格を容赦なく暴き立てながら，一方では夫の侯爵が真の貴族であるように，彼女は大貴婦人という，今のフランスでは稀になった「二つの見事な典型」(p.475) を表している[25]と述べている。これはすなわち，侯爵夫人は個人として見れば冷酷な性格を示し，病的であるかもしれないが，それはこの時代の同じ地位にある女性には共通して見られる症例であり，彼女たちは時代によって否応なくそうした状況に追い込まれていることを暗示していると考えられる。

前の部分で，ビアンションが社交界の女王はもはや女性ではなく，怪物性の症候を示す存在に過ぎないと言っていることはすでに見た。ではどうしてそのようなことになるのか。彼は次のような言葉でそれを説明している。

> 一人の女性が一日の天下を得るために必要な特質とは，恐るべき悪徳に他ならない。彼女は本当の性格を隠すために自らの本性をねじ曲げるのだ。社交界において戦いの日々を送るためには弱々しい外見の

下に鋼鉄のような健康さを持たなければならないんだ。(p.424)

こうした女性たちの悪疾とは，社交界の女王となるために自らの感情を殺し，自分と他人の全てを犠牲にする冷酷さに徹しなければならないことである。

君が愛して已まない社交界の女王はもはや何も感じることがない。彼女の燃えたぎるような快楽は，その原因をたどれば冷え切った自らの本性を再び熱くしたいという欲求に根ざしている。彼女は感動と悦楽とを欲しているのだ。[…] 彼女は心よりも頭が勝っているために，自らの勝利のためなら真の情熱も友人も犠牲にする。(同)

という。そして「僕は医者として，胃の健全さが心の健全さと両立しないことを知っているのさ」(同) と断言するのである。

社交界で流行の中心となる女性に対するこのような見方は，バルザックに限られるものではなく，この時代においてはある程度共有されていた。中でも1840年に出版された『フランス人の自画像』はその顕著な例の一つであろう。この書物は当代一流の作家とイラストレーターを集めて編纂された豪華本であり，パリと地方に見られるさまざまな階層の人間の特徴をユーモアを交えて描いた八巻から成る「十九世紀風俗百科」であるが，バルザックもいくつかの章を書いているパリ編第一巻に「社交界の女王」[16] と題された一章がある。

このテクストでも社交界の女王である一人の架空の伯爵夫人を登場させており，その人物像は『禁治産』のデスパール侯爵夫人と多くの共通点を持つ。「社交界の女王の評判と権力は，男の政治家の評判と権力と同じく，いつの瞬間にも問題視され，危険にさらされる」[17] のであり，この「流行」という不安定で気まぐれな恩寵を維持するために，彼女は全てを犠牲にする。

[彼女]は首尾よくやるためにあらゆる手を使った。流行の恩寵を維持するための手段について確信が持てなかったために，どんな手段も見逃すまいとした。親も，友人も，財産も，全てが社交界で注目を浴びたいという飽くことのない欲望のために犠牲にされた[18]。

その結果，社交界の花形であり続けようとする女性はどうなってしまうのか。「虚栄心と，傲りと，エゴイスムとが，彼女の感じやすさや，優しさや，善良さを窒息させてしまった」。もし彼女が「社交界の女王という称号を失うことがあったら，彼女にはもはや何も残らないだろう」(同) というのである。

『フランス人の自画像』の第一巻は，『禁治産』がバルザック自身が所有する新聞『クロニック・ド・パリ』に掲載された四年後に出版されている。二つのテクストの間に影響関係があるのかどうかははっきりしないが，ここには社交界の花形というタイプの女性について，『禁治産』のように社会生活の一コマから医学の目を通して同時代を分析するという奥行きは見られないものの，共通する考え方，共通する言語が確実に見出される。

このような観点から，もう一つ比較するのに興味深いテクストは，同じ『フランス人の自画像』の第一巻に収録されている「淑女」と題された章である。こちらはバルザック自身によって書かれた社会の一タイプの描写である。のちに『続女性研究』という中編小説の一部として『人間喜劇』に組み込まれる[19]ことになるが，ここでは『フランス人の自画像』に見られるオリジナルの形で『禁治産』との比較を試みる。このテクストは，パリで散策していて出会うすばらしく洗練された女性，すなわち「淑女」(la femme comme il faut) を描写していく。これらの女性たちは趣味の良さと，才知と，優美さと気品を兼ね備えている。レジョン・ドヌール勲章受勲者の妻であり，大公たちから愛されることもある。また自分の周りに小さなサロンを作ることにも長けている。彼女たちはあらゆる点において通俗的なブルジョワの女性たちとは対照的な存在であり，テクストは十分にその比較を展開してみせるのであるが，実はこの淑女たちが比べられている対象がもう一つ別にある。それが「大貴婦人」(la grande dame) である[20]。

『フランス人の自画像』の「淑女」の章は，冒頭から半分以上の部分がこれら淑女たちの描写に充てられるのであるが，最後の数ページで，こうした女性たちが「近代の発明であり，選挙制度の嘆かわしい勝利が女性に適用された結果の産物である」ことが明かされる[21]。淑女たちの登場はナポレオンの民法典に基づいた社会制度がもたらしたものであり，その結果かつてパリの社交界に君臨していた大貴婦人たちは過去の遺物として追いやられてしまった。テクストはこうした時代の変遷を次のように語っている。

> 過去のおよそ五十年になろうとする間に，我々はあらゆる社会的優越が絶えず破滅に追いやられるのに立ち合うことになった。この大いなる難破から女性たちを救出すべきであったのだが，民法典の項目は彼女たちを無視してその頭上を通り過ぎることになった[22]。

このようにしてかつての大貴婦人たちは新しい時代の流れによって徐々に追い詰められていくことになる。

> 過去においてヨーロッパに名だたるサロンを形成し，世論を操り，手袋を裏返すようにたやすくそれを裏返すことができ，社交界を左右する影響力を持つ芸術家や思想家を支配することによって，社交界を支配することができた女性たちは，権力に酔ったブルジョワ階級と闘わなければならないことを潔しとしないために，戦場を放棄するという誤りを犯したのである。(同)

ここに描かれた大貴婦人の姿は，まさに『禁治産』におけるデスパール侯爵夫人と重なるものである。この1836年の中編小説においてデスパール夫人は「大貴婦人」と呼ばれており (p.475)，上の『フランス人の自画像』からの引用に呼応するように，彼女が及ぼす政治的な影響力の大きさについては次のように書かれている。

> 彼女のサロンは政治的な体裁を帯びるようになった。「デスパール夫人のところではどう言っているの

だ？　デスパール夫人のサロンはこれこれの政策には反対らしいぞ」などという言葉が数多くの軽薄な者たちの間で取り沙汰され始め，彼女に忠実な者たちの集団に派閥のような権威を与えるようになった。[...] 侯爵夫人が下院議員あるいは上院議員に漏らした言葉や考えが，議会の演壇を通してヨーロッパ中に響きわたることも一度ならずあったのである。(p.454)

しかしながらデスパール侯爵夫人は，こうした気品と権威を兼ね備えた大貴婦人の最後の世代に属しているに違いない[23]。この貴婦人は大革命以降の時代の変遷に否応なくさらされながらも，なおも前線に立って闘い続ける存在として描かれている。彼女が抱える「病気」は，王政復古末期の時代に大貴族の女性たちが置かれた窮迫した状況を反映しているのである。

侯爵夫人だけではなく，侯爵が直面する問題も十九世紀の前半という時代を強く反映しており，そのことは明確に示されている。侯爵の秘密の物語を聞き終わった後で，ポピノは次のように述懐している。

パリにおいては最も純潔な美徳が，最も浅ましい誹謗中傷の的になるものなのです。この社会の現状が，侯爵の行為を崇高と見なさなければならないものにしているのは不幸なことです。わが国の名誉のためにも，こうした行為が全く当たり前のものになることが望ましいのでしょう。しかし当今の風俗習慣に引き比べると，私はデスパール侯爵を禁治産の判決で脅すどころか，栄冠を捧げるべき人物と見なさざるを得ないのです。(p.490)

引用の最初にある「パリにおいて」とは，この時代のパリという意味で言われているのは明らかであろう。誰もが過去において不当な手段で手に入れた財産を当然のように自らのものとしている世の中においては，それを返還しようとする侯爵の誠実な行為が，異様な行動のように見られてしまう。それは誹謗中傷の的になるばかりか，狂気の烙印まで押されかねないのである。この世間では，それほどに不正がまかり通っている。

もしもどのような方法であれ，たとえ汚い策謀によってであれ，没収された土地を，百五十年経って返還しなければならないとしたら，フランスにはほとんど合法的な私有財産が存在しないことになってしまうでしょう。(同)

ともポピノは言っている。つまりそれほどに不正が蔓延し，当然のこととなったために，侯爵のように先祖が横領した土地財産を本来の持ち主に返還したいなどと言うのは突飛な行動と見なされ，そのようなことを考えつくのは社会的に不適格な人間だと思われてしまう。この小説では問題の土地は宗教戦争の混乱に乗じて横領されたことになっているが，作者が同時にフランス革命後の混乱にも暗に言及しているのは明らかであろう。そういう意味では，十九世紀前半の社会において，デスパール侯爵のように真に名誉を重んじる貴族の居場所がなくなり，半ば変人のように見られてしまうのは当然のことである。侯爵夫人の側に見られたのと同じ状況が，侯爵にも影

響を及ぼしているのである。

しかし恐らくこの小説が提起する最も大きな問題は，デスパール侯爵や侯爵夫人それぞれの問題と言うよりもむしろ二人の関係，すなわち夫婦の問題であるように思われる。これは貴族の夫婦が訴訟で争う物語であるが，デスパール夫妻は1812年頃に結婚し，1815年頃から別居を始めるようになった（p.451）と書かれている。この大貴族と貴婦人との組み合わせは，最初の頃から齟齬をきたしていた。侯爵夫人の言い分によれば，侯爵が急に田舎に引っ込んで暮らすことを提案し，彼女はそれを拒否したのだということである。

> 1816年の初め，三ヶ月前から性格にすっかり変調をきたしていた侯爵は，急に私に領地の一つであるブリアンソン近郊に移り住む提案をしたのでした。私の健康はそこの気候によってだめになっていたでしょうし，私のパリでのそれまでの暮らしぶりにもお構いなしでした。私は侯爵について行くのを拒否したのです。(p.460)

侯爵がこうした提案をした理由は，無論曾祖父の悪事を知り，散財を慎んで横領した土地に相当する金をジャンルノーに返還する決心をしたからであるが，この引用からは侯爵夫人がこの時点ですでに侯爵に何らの愛情も感じていないこと，またそれを越えて侯爵に対してある種のいらだちを感じていることが読み取れるだろう。

一方，侯爵は夫人が結婚の最初から金遣いが荒く，奢侈を好む傾向があったと漏らしている。「結婚後しばらく経ってから，妻は大変な出費を始めました。それで私は借金に頼らざるを得なくなったのです」（p.482）と彼は言う。恐らくはこの頃から芽生えていた妻に対する違和感は，ジャンルノーの財産横領の件が持ち上がるとともに決定的になる。

> このときから，私が夫人に対して抱いていた幾ばくかの幻想が失われ始めたのです。私は妻にパリを離れて地方に行こう，そうすれば土地収入の半分もあれば立派に生活でき，より早く例の財産の返還ができるだろうからと言いました。私は妻にその話をしていましたが，重大な事実については隠していました。ところが私がそれを申し出ると，デスパール夫人は私を気違い扱いしました。その時に私は妻の本当の性格を知ったのです。(p.485)

ここで侯爵は夫人の性格の冷たさに戦慄を覚え，子供に対しても愛情を抱いていないことを知ったという。そこから二人は別居するようになり，侯爵は自力で子供を育てながら借金を返す決意をした。

こうして見れば，デスパール侯爵夫妻は，愛し合って結婚したわけでも，お互いに相手の性格を理解し，惹かれるものを感じているわけでもないことがよくわかる。それどころか，二人は高貴な身分の大貴族同士ということで，相手のことをほとんど知ることもなく結婚したであろうし，結婚後も双方の意思疎通などというものはないに等しかったに違いない。ここに恐らく二人の真の悲劇がある。それは貴族同士の結婚という社会制度から必然的に生じてくる悲劇である。『禁

治産』は最終的には夫婦間の意思疎通の不在に関する物語，夫婦の断絶に関する物語である。

ところで，このような視点は，バルザックがすでに1829年に『結婚の生理学』で提示していた問題に通じる。『禁治産』もまた，このバルザックの本格デビュー作品において描かれた結婚の諸相から敷衍して紡ぎ出された物語の一つなのである。『結婚の生理学』によれば，十九世紀前半の社会において，夫婦の間に生じるさまざまな問題は，この時代における結婚制度そのものの欠陥から生じるものだという。そこでは知られているとおり「姦通」の問題が大きく取り上げられているのだが，根本的には男と女がお互い相手のことをほとんど知らないまま結婚してしまい，またそののちも夫が妻の気持ちをつなぎ止めるために何らの努力も払わないという当節の結婚のあり方に疑問が投げかけられている。そしてこの書物においては，タイトルが示すとおり，夫婦の問題の追究は終始一貫して医学の比喩を用いて語られるのである[26]。

『結婚の生理学』の作者は読者に対して，病弊のありかをつきとめ，「この夫婦生活が患っている病の原因をより深く突きとめよう」[27]と呼びかける。そしてその原因を同時代における法制度の不備や風俗の乱れに見出そうとするのである。

> こうして現行の社会体制が冒されつつある密かに進行する病気を単刀直入に暴いたあとで，われわれはその原因を法律の不備や，風俗の乱れ，人々の智恵の足りなさや，わが国における慣習の矛盾などに求めてきた。（同書，p.976）

そしてこうした結婚制度の欠陥は何度も身体的な「傷」に喩えられる。それは「わが国における結婚が抱えている深い傷」（p.1005）であり，この時代における「巨大な社会の傷」（p.972）に他ならない。作家は「思想の解剖学者」（p.910）として，夫婦の関係という私生活の内部に入り込み，その病理を探ろうとするのである。

『結婚の生理学』をこのような視点から振り返ってみると，ここで使われている「傷」（plaie）の語が，『禁治産』においても決定的な場面で使われていたことが思い出されるだろう。それは，ポピノがデスパール侯爵夫人の企みを暴いて見せた場面，そして侯爵が自分とジャンルノーの関係について，「秘密の傷」を明かそうとしている場面である。これらの場面は確かに，直接的に侯爵夫妻の夫婦関係に言及しているわけではないが，夫と妻のそれぞれが抱えるこうした病患が，二人の間の断絶の原因となっているのは確かである。

小説としての『禁治産』は，社会階層の最も高い位置にある人物たちの秘密を探り，その病理を明らかにした作品だと言うことができる。人から羨まれる社交界の女王である侯爵夫人，そしてパリの入り組んだ通りにひっそりと暮らし，近所の住民からさえ冷たい目で見られる侯爵の私生活の中に深く入り込み，そこに隠れた傷を見出す観察方法はまさに解剖的であり，バルザックはこうした視点を当時の医学から学んだのである。

おわりに

「僕はこの事件の結末がどうなるのかぜひ知りたいのです」(p.468) とビアンションはある箇所で言っている。それはポピノと彼が侯爵夫人との会見を終えて帰る場面である。この翌日にジャンルノー夫人がポピノを訪ねてやって来，さらに二日後にポピノはデスパール侯爵を訪ねてジャンルノー家と侯爵の関わりを知ることになる。

これまで見てきてわかるように，この小説はさまざまな断片をつなぎ合わせたような作品である。長いとは言えない小説でありながら，最初のラスティニャックとビアンションの会話から，貧しいフアール街の描写，デスパール侯爵に対する禁治産請願の文面，侯爵夫人との会見，そしてポピノと侯爵の会見と場面は次々と転調していくが，しかしながら全体は非常に緊密な構成を持っている。それらは物語を散漫にしていくどころか，それぞれの断片が侯爵夫妻の私生活の謎を解き明かし，二人の関係に潜む傷口をより明瞭に提示するために不可欠な糸口として位置づけられているのである。

ところでこの小説において，物語の全ての要素を掌握し，それらを「語る」ことのできる立場にあるのはビアンションである。この医者の登場人物は，ラスティニャックの側にいて侯爵夫人を冷静に観察し，叔父のポピノを夫人の邸宅に導き，その会見にも同席している。それに続いてポピノがデスパール侯爵を訪問するときには，彼は同行していないが，きっとあとから叔父にその話を聞いたことだろう。これは単なる推測ではない。『娼婦の栄光と悲惨』には，ビアンションが実際にこの物語を友人のリュシアンに打ち明けたことが書かれているのである[28]。

医師ビアンションがこのように物語の随所に観察者として立ち合い，その顛末を俯瞰することができる立場に置かれているということは，彼に代表される一つの視点の存在を証明する。『禁治産』は判事ポピノが中心人物となって活躍し，侯爵夫妻の間の禁治産訴訟を巡って物語が展開することからもわかるように，司法的な側面が前面に出た小説であるが，そこには目立たないながら医学の視点も終始一貫して存在しており，それを裏から支えている。これは司法小説であると同時に，『人間喜劇』にあって医学小説の隠れた傑作でもあるのだ。

注

1）« Histoire du texte » du *Colonel Chabert,* in Balzac, *La Comédie humaine,* édition publiée sous la direction de P.-G. Castex, Gallimard, Bibliothèque de la Pléiade, t. III, 1976, pp.1333-1335.

2）Moïse Le Yaouanc, « Sur *L'Interdiction* », in *L'Année balzacienne 1971* ; Michel Lichtlé, « Sur *L'Interdiction* », in *L'Année balzacienne 1988* ; Guy Sagnes, « Introduction » à *L'Interdiction,* in Balzac, *La Comédie humaine, op.cit.,* t. III, pp.405-420. ル・ヤウアンクはこの小説のことを「一つの司法生活情景」(une scène de la vie judiciaire) と呼んでおり (Moïse Le Yaouanc, *op.cit.,* p.254)，リシュトレは当時の法制度に照らし合わせ，この物語の設定の妥当性や，判事ポピノの人物像について論じている。

なお日本においては，従来の禁治産制度は差別的な点が多いなどの理由で廃され，2004年4月から成

年後見制度が新たに発足している。しかし本論考においては，「禁治産」（interdiction）の語自体が作品発表時におけるフランスの法制度に基づいていること，また当時の社会的背景などを考え合わせ，訳語としてそのまま残すことにした。

3）この論文は，『禁治産』を扱っているという点で，私が以前に行った「街角の病理解剖学」と題する研究発表と対をなすものである（獨協大学で開催された国際フォーラム「バルザックとその時代」（2001年12月）における口頭発表「街角の病理解剖学――十九世紀パリへの医学的視線」。『獨協国際交流年報』第15号（2002年12月発行）に掲載）。本論文は，小説の進行に即して言うなら前の発表の続編を成すものだが，その扱う部分も，医学としての分野も異なっており，内容の上では十分に独立していることをまず述べておきたい。

4）*L'Interdiction,* in Balzac, *La Comédie humaine, op.cit.,* t. III, 1976. 本論考においては，『禁治産』からの引用はすべてこの版のページ番号のみを示す。訳文はすべて筆者による。

5）symptômes の語は「症状，症候，徴候」などの訳語を当てはめることができるが，ここでは身体内部における病変の徴候を表す医学用語であることを明確に示すために「症候」の語を用いた。この一節における「症候」の語の使用と，同時代の医学との関係については，すでに拙論「バルザックにおける「症候」の概念と医師ナカール」（『関西フランス語フランス文学』第4号（平成10年3月発行）掲載）において論じたことがある。

6）Guy Sagnes, « Introduction » à *L'Interdiction, op.cit.,* p.413.

7）Michel Foucault, *Naissance de la clinique,* 3e édition, Presses Universitaires de France, coll. «Quadrige », 1993 (1e édition, 1963). とりわけ Chapitre VII. Voir, savoir ; Chapitre VIII. Ouvrez quelques cadavres を見よ。

8）「医学の眼差しは自ら探索することを課した空間の中に入り込んでいく。[…] 解剖臨床的経験において，医学の目はそれが身体の中に潜入していき，[…] 深みへと降りていくに従って，疾患が姿を現し階層化するのをその行く手に目にすることになる」（M. Foucault, *Naissance de la clinique, op.cit.,* p.138）。

9）拙論「街角の病理解剖学――十九世紀パリへの医学的視線」（前出）参照。

10）「この[ポピノの]古ぼけた住まいは十二区ではあまねく知られていた。天はあらゆる病気に対しそれを治し和らげるための薬草をもたらすように，この土地にこの裁判官を与えてくださったのであった」（p.429）。

11）この時代のパリ十二区は，現在の市制では五区に相当する。

12）外科医デプランはビアンションの師であると同時に，のちには親友にもなる。そのあたりの経緯はバルザックの別の作品『無神論者のミサ』に詳しく書かれている。

13）同じように貴族の夫人が夫の財産を自由にしようとする話は，『ゴプセック』においても見られる。この作品でレストー伯爵夫人は，愛人の借金の担保として夫の家に代々伝わるダイヤを提供しようとする。ただしバルザックの読者なら誰でも知っているとおり，レストー伯爵夫人はもともと貴族の生まれではなく，ゴリオ爺さんの娘である。

14）ここで「罪悪」と訳した語は le mal,「汚点」は une tache,「汚れ」とは souillure であり，それぞれ身体的な連想を喚起しないでもない。これらの語は文脈によっては，mal は「病気，病患」，tache は「（皮膚などの）斑点」，souillure は体内から出る「汚物」などの訳語が当てられるだろう。

15）バルザックは若い頃，歴史小説家ウォルター・スコットの影響を受けて，フランスの各時代を小説作品により代表させた『絵画的フランス史』の出版を目論んでいた。デスパール侯爵の『絵画的中国史』は，小説を読む限りでは学問的著作と見受けられるが，そうした記念碑的作品が世間で評価され，経営的にも上首尾であるという説明は，若き日のバルザックの夢を空想の上で実現させたものと見なすことができる。

16）« Une femme à la mode », par Madame Ancelot, in *Les Français peints par eux-mêmes,* Paris, Curmer (8

vol., 1840-42), t. I, 1840, pp. 57-64. 作者のアンスロ夫人は，劇作家ジャック・アンスロ夫人マルグリットで，ディジョン生まれの作家（1792-1875）。バルザックは同じ巻で「食料品屋」（L'épicier）と「淑女」（La Femme comme il faut）の二章を書いている。

17) 同書，p.59. 『禁治産』においても，社交界の花形の女性は男性の政治家と比べられている（p. 424）。しかしバルザックにとっては，男の政治家が他よりも抜きんでるのは名誉なことであるが，女性は恐るべき悪徳によってしか支配権を得ることができないとする。

18) 同書，p.60.

19) この「淑女」（La Femme comme il faut）と題されたテクストは，1838年12月以前に書かれ，1839年5月に『フランス人の自画像』第1巻に収録されて出版された（この巻に記された出版年は1840年となっている）。『続女性研究』がこのテクストを組み込んだ形で公表されたのは，フュルヌ版『人間喜劇』第2巻（1842年）においてである（« Histoire du texte » d'*Autre étude de femme,* in *La Comédie humaine,* t. III, *op.cit.,* pp. 1485-89）。内容はほとんど変わっていないが，後述するように（注21参照），小説に取り入れるに当たって若干の構成上の変更が行われている。

20) このテクストの la femme comme il faut と la grande dame に対応する訳語，「淑女」「貴婦人」については，最近出版された『バルザック幻想・怪奇小説選集』第3巻（水声社，2007年）所収，加藤尚宏氏による『続女性研究』新訳より借用した。

21) « La femme comme il faut », par Balzac, in *Les Français peints par eux-mêmes,* t. I, *op.cit.*, p. 30. このテクストが『続女性研究』に挿入されるに当たってはこの順序が逆転し，『フランス人の自画像』における最後の数ページ分が説明の冒頭に置かれるという「組み換え」が行われている。

22) 同.

23) これまでたびたび引用してきた『フランス人の自画像』第1巻には，「1830年の大貴婦人」と題された章もあり，ここでも近年の大貴婦人は昔とはちがうというニュアンスで語られている。「真の大貴婦人，すなわちかつての大貴婦人というのは <融合> の時代と呼ばれる現代のフランスにおいてはもはや存在できないことを知っておかなくてはならない」（« La grande dame de 1830 », par Stéphanie de Longueville, in *Les Français peints par eux-mêmes,* t. I, *op.cit.*, pp. 161-168）。文脈を踏まえるならば，この章で描写される「1830年の大貴婦人」は，むしろバルザックの言う「淑女」の類型に近いと言わなければならない。

24) ラエンネック（René Laennec, 1781-1826）は，この時代に聴診器を発明し，『間接的聴診法論』（*Traité de l'auscultation médiate,* 1819）によって聴診法を世間に広めた。また彼は最初に紹介した解剖臨床的医学の推進者の一人でもある。バルザックの友人で家族の医者でもあるナカールは，バルザック宛の手紙の中で「ラエンネックのおかげでわれわれ医者はあなた[=バルザック]の器官を解明でき，治療方法はそこから当然の帰結のように導き出されるでしょう」と書いている（Lettre du docteur Nacquart à Balzac, 24 août 1837, in Balzac, *Correspondance,* édition de R. Pierrot, Garnier, t.III, 1964, p.333）。

25) ギ・サーニュはプレイヤード版の注において，バルザックのデスパール侯爵夫人に対する態度は曖昧であり，一見批判的であるが実際には熱意ある共感に満ちていると書いているが，的を得た指摘である。Cf. « Notes et variantes » pour *L'Interdiction, op.cit.,* t.III, p. 1385.

26) この時代の臨床解剖的視点に基づく新しい医学が，『結婚の生理学』におけるバルザックの社会分析にもたらした影響については，すでに拙論「『結婚の生理学』の教えるもの——夫婦生活と病理学」（日本バルザック研究会編『バルザック』生誕200年記念論文集，駿河台出版社刊，1999年）において論じたことがある。

27) *Physiologie du mariage,* in *La Comédie humaine, op.cit.,* t.XI, 1980, p.956.

28) *Splendeurs et misères des courtisanes,* in *La Comédie humaine, op.cit.,* t.VI, 1977, p.513. 『禁治産』の物語は，ポピノがデスパール侯爵夫人の策略により事件からはずされ，夫人に有利な判決になることを暗示して終わる。一方，『娼婦の栄光と悲惨』では，さらにリュシアンが語ったこの話が主席検事にまで伝わ

り，スキャンダルを恐れた裁判所が侯爵の禁治産を不成立にし，侯爵の勝訴に終わった話が書かれている。ビアンションの話が回り回って訴訟の流れを変えた格好になるが，本論ではそこまで立ち入ることはしない。